

Title	太古より黎明期に至るアジア
Sub Title	
Author	江上, 波夫(Egami, Namio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.2 (1948. 6) ,p.21(167)- 45(181)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯東亞文明の始源
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480600-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

太古より黎明期に至るアジア

江上波夫

アジア、殊に東亞大陸こそは、現在知らるる限り最古の人類棲息地である。中部ジャワ、トリニール河畔に於いて一八九二、九三年、デュボアにより発見されたピテカントロプス・エレクトス (*Pithecanthropus erectus*) は、或は猿類、或は人類、或はその中間型等と主張されて、種々なる論議を惹起したが、今日學界の趨勢は大體人類説に傾いてをり、一九二六年以降、ズダンスキー、ブラック、裴文中、楊鍾健等によつて北京西南郊周口店石灰岩洞窟中より檢出されたシナントロプス・ペキネンシス (*Sinanthropus pekinensis*) も、ピテカントロプスと相似の點を多く有したが、然もこれは火を使用し、石器を豊富に製作し、獸骨に加工し、明らかに人類としての文化の所有者であつたことが判明したのである。従つて洪積世初期に屬するこのシナントロプスを以て今日知らるる限り、世界最古の人類となすことに何人も異論がないのである。さうしてこの人類は、その

下顎骨の内面、小白齒の附近に半球狀の骨瘤を屢々發達せしめ、上門齒の内側に匙狀の凹みを有することを以てその特徴の一としてをり、前者は類人猿には見られぬが、蒙古系人種には顯著で、甘肅、河南の新石器時代人のみでなく、現代の日本人や中國人にも珍らしくない。後者も西洋人には稀であるが、東洋人には一般的である。これらのことからシナントロプスは間違なく蒙古系人種の祖型であらうとはワイデンライヒの意見で、果して然りとすれば東亞は太古より東亞人の天地であつた譯である。さうしてシナントロプスは腦型の研究よりして、既に言語の能力を具へ、右手利きであつたこと等が推定されてをり、その石器製作技術に握槌石器の手法と共に、剝片石器の手法を有することは、猿人的體質の所有者にも拘らず、その智能の意外に發達してゐたことを物語る。

次に、印度に於いては南印度のマドラス地方や中部印度

のゴダヴァリ溪谷等より歐洲の初期舊石器に對比される形式の石器類、就中握槌型石器を多く出土することが從來注意されてゐたが、最近北部印度に三回の氷河期の存在が明確にされて、その第二回氷河期、即ち洪積世前半期の礫層中より、握槌型石器をはじめ、剝片を以つて作つた種々の原始的な石器を發見し、印度に於いても洪積世前半期に既に相當な文化を有した人類の棲息が確認されるに至つたのである。さうして類似の握槌型石器はフートン、シャルダン等によつてビルマのイラワヂ河流域に於いても最近多數見出された由であつて、かくしてアジヤ、殊に東亞大陸が人類最古の棲息地として、従つてまた人類文化の搖籃の地として注目されつつある。

次に洪積世中期頃に及べば、人類棲息の範圍がアジヤに於いて、就中東亞大陸に於いて更に擴大した事實が近時續々闡明されてゐる。

先づ西南蒙古のオルドス地方や、北支那の陝西、甘肅地方の諸處に於いて洪積世中期、黄土形成の前後に活動した人類の遺蹟が、一九二三年リサン並びにシャルダンによつて見出された。即ちそれらの地方には水邊に住し、當時羣棲した有毛犀、象、馬、ヒエナ、牛、鹿、羚羊等を狩獵し、之を石七、尖石、石刃等の剝片石器系小形石器、所謂細石器を以て調理して、衣食の用に供したところの人類が少な

からず生存してゐたのである。さうして彼等の住居地は破摧した獸骨の堆積と豊富な石器との殘存によつて認知された。その石器は歐洲の中期舊石器（ムステリアン後期、或はアウリナシアン前期）に對比される形式のもので、所謂剝片石器の全盛を示してをり、その小形によつて細石器（microlith）と呼ばれる種類のものであつた。

一方、一九二八年シペリヤのイルクーツク市附近マルタ村に於いてほぼ同時代の一遺蹟が發見されたが、ここに於いても舊象、野牛、有毛犀、馴鹿、馬等の獸類遺骨と共に、之を調理するに使用された細石器類—石七、石刃、刻刀、尖石等—が多數見出されたのである。さうしてそれらはオルドス地方の細石器に比較して、一層形式の變化に富み、打調の精巧なもので、細石器文化の一層の發達が明瞭に觀取された。かくて早くもシナントロプスに於いてその萌芽を見た剝片石器的手法が洪積世中期の東亞、殊にその北方地域に於いて著しく進歩し、所謂細石器文化となつて普遍化し、その方面の舊石器時代狩獵民の文化を特徴づけたことが判明したのである。さうしてこの文化的特徴はアジヤ北半に永續して、その新石器文化の根幹をなすに至るのである。

然しマルタの舊石器文化に於いて特別重要な事實は、實に骨角器類の顯著な發達であつた。即ちそこに骨錐、骨刀、

骨針、象牙製棒、鹿角製槌斧等が見出されたばかりでなく、骨で作られた有翼の鳥形や魚形の垂飾品、或は表面に刻點を以て渦文を描き、裏面に三匹の蛇を彫刻したと思はれる矩形の平板、更に舊象の圖様を刻線を以て現した象牙製飾板や、十二個の象牙製女性丸彫像等が出土した。就中その舊象圖様や、女性裸像は歐洲のアウリナシアン期のそれと殆ど全く同一のもので、亞歐大陸を通ずる東西文化交流の意外に古く溯ることを實證したものと觀られ、全く驚嘆に値するばかりでなく、マルタの洪積世中期人が既に相當發達した美術的表現力と宗教的思想を有したことを指示するものであつた。なほ彼等は砂岩の石疊を以て周圍を圍まれ、中央に爐のある住居に住まひ、その子供を葬るのに頭環、頸飾など種々な副葬品を以てしたことも判明し、かくて東亞と西歐とは洪積世中期頃、既に兩地間に交渉を有し、相應する文化の發達を見たことが明瞭になつたばかりでなく、その中間たる南露に於ける同種の遺蹟遺物の最近の發見は、アウリナシアン美術の起源の問題に對し、廣く亞歐に互つてこれを取扱ふべきことを要請したものととして世界の注目をあつめたのである。而してかくの如きマルタの舊石器文化と本質的に同一な文化が、東は少くも北滿まで擴がつてゐたことが、哈爾濱郊外顧郷屯に於ける徳永重康博士、直良信夫兩氏の發掘の結果と、ジャライノール、ハ

イラール方面に於ける出土品に徴して近時明瞭になりつつあるが、北滿の舊石器文化も骨角器類の盛行を以て特徴づけられたものである。

かくて東歐に連なるシベリヤ及び北滿の中期舊石器文化が細石器と共に骨角器を以てその特徴としたことは、オールドス、西北支那方面のそれが細石器のみを有して、殆んど骨角器類を缺いたのと判然區別されるところであり、この現象は當時東歐、シベリヤ、北滿が寒帶的森林地帯であつたのに對し、オールドス、西北支那方面が内陸的草原地帯であつた環境の相違に基づくものであらう。寒冷な北アジアの亞濕潤地帯は當時舊象、馴鹿、麋等巨大な角牙を有する動物に富み、自ら骨角資材の入手に便宜が多かつたばかりでなく、その氣候は骨角器の製作、殊にその耐久性にとり最も好都合な條件であつた。而して骨角器文化の發達を助長するこの環境——寒帶的森林地帯の條件はその後も永續して殆んど今日まで變らず、後期舊石器時代、新石器時代に於いてその骨角器は益々多種多様な、精巧卓拔な器形技術を生み、遂に一種の骨角器文化圏をロシア、シベリヤより北滿、東滿、北日本に互る北部亞歐の廣域に現出することになつたのである。

一方内陸アジアの乾燥した氣候は骨角の類を直ちに風化し、自然の龜裂を發生せしめ易く、骨角器の使用保存上最

惡の條件を有し、従つてそこに骨角器文化が殆ど發現しなかつたのも無理はないが、一方同地域は概して火山岩系硬質岩石に富み、その採取利用に便宜が多かつたので、専ら細石器文化の發達を見るに至つた。然かもこの現象は新石器時代に及んで、蒙古高原以西の内陸アジア全域に一層顯著なものがあつた。

次に洪積世後期のアジア、殊に東亞に於ける人類の生活文化に就いては、なほ多く闇黒の域を脱しないが、シベリヤのイエニセイ河上流域アフォントヴァその他の洪積世後期に屬する遺蹟、北支周口店上洞の同時代遺蹟等に就いて見るに、當時のシベリヤ及び北東アジア住民は益々その狩獵生活を發達せしめ、殊に石刃及び骨角牙器類の豊富なる製作を以て特徴とし、その石刃、骨針、骨篋等を以て恐らく毛皮の衣服を調へ、その骨牙製の管玉、勾玉、平玉等を以て頸腕を飾つたことが窺はれ、狩獵民としての生活の向上に顯著なものがあつたやうである。一方所謂指揮棒なる鹿角製品の存在は、歐洲に於ける同時代文化、即ちマグダレニアン文化との間に相當密接な關係の存在を物語るものであつて、亞歐大陸北部に於ける東西の人類移動、文化交流はこれより漸く頻繁に向ふ傾向が著しい。

要するにシベリヤ及び北東アジアの舊石器時代人は狩獵生活を營み、骨角器文化を發達せしめ、新石器時代に於け

るその地方の骨角器文化圏成立への先驅的役割を果したのである。實際この地方の住民の生活は舊石器時代の昔から、新石器時代を通じ、更にその後長く大變化がなかつた。それは肉類と毛皮類を潤澤に供給する鳥獸魚族に富んだ寒帶的森林地帯の環境が、東は北太平洋沿岸から、西はウラル山脈に至る北東アジア及び全シベリヤの南部を掩ひ、更に北歐に連つて地域的に廣大であるばかりでなく、この環境が時間的にも洪積世より殆んど現在まで永續して、その原住民が終始狩獵漁撈民であることを可能ならしめたからに他ならない。従つて彼等の一部が後世牧民化し、或は農民化したのは彼等自身の創意に基づく生活の轉換ではなくして、寧ろ外部、就中南方よりの影響に因る場合が多い。

かくてアジア北部の森林地帯住民はその新石器時代に於いて、舊石器時代以來の傳統を承け、狩獵漁撈の生活を續け、骨角器文化方面に獨特の進歩を遂げた。即ち彼等は河邊、湖畔、灣岬など狩獵漁撈に便利な地を選んでその居をトし、住居は丸太小屋或は塹壕の類であつたが、時にその小聚落を圍む土壁或は塹壕の類を有した場合もあつた。彼等は石製骨製の鎗首や矢鏃を附した槍、弓矢、同じく石骨製の劍等を以て鳥獸を狩獵し、石刃嵌入の骨刀、石七、石錐、敲石、石皿、石棒等を以てその獲物を調理し、骨鉤、骨鈎等を用ひて漁撈に従事した。彼等はまた各種の石斧類

を以て伐木掘土し、その住居を營み、骨針を愛用して裁縫し、或は墨黥したやうに推測される。また石或は骨を以て鳥獸形、魚形の彫刻品を好んで細工したが、之は狩獵漁撈の豐獲を祈願する爲のものであつたらう。彼等は相當豊富に土器類を有し、就中丸底の櫛目土器 (kamni-keramik) は彼等の間に普遍的に、且つ長期に亘つて使用された代表的な土器であつた。さうしてその起源は疑なく西方、即ち歐露、北歐方面に在つたのである。また彼等の間に弘く行はれた刳込ある特殊な石斧も、筥形の骨劍、石劍も同形品が北歐に見出される。殊に骨角製品の豊富なことは、亞歐大陸北部の森林地帯に於いて新石器時代に東西共通した現象であり、かくてこの地帯全域に亘つて本質的に同化した一大狩獵文化圏——所謂骨角器文化圏——の存在が認められ、ウラル以東は同文化圏の東半部に他ならぬのである。而してその狩獵文化圏は漸次西方の部分より金屬器の使用を見るに至り、また南方の部分には牧畜及び農耕の生活技術が導入されて、西紀前千五百年頃アルタイ山麓方面に有力な半狩獵半遊牧民の出現を見、また同五百年頃北滿北鮮方面に半狩獵半農耕民の發展を見るに至つたが、北亞の狩獵文化圏の大部分の住民は山岳と森林とによつてアジアの南方の部分から隔絶され、その方面よりの經濟的、文化的刺戟を受けること少く、永く狩獵漁撈生活の

域を脱しなかつた。さうして所謂舊アジア人によつて代表されるその後存者はオホーツク海沿岸に骨角器文化の最後の華を咲かせたのである。

次に内陸アジアの乾燥した草原地帯に於いては、北部アジアの森林地帯と稍々事情の異なるものがあつた。即ちここでは舊石器時代以來の人類及び文化が後者に於ける如く新石器時代まで連續せず、兩時代の間に相當長い空白の時代が存在したやうである。ネルソンは外蒙古に於いて中石器時代に屬する遺蹟を發見したと言つてゐるが、これのみでは中期舊石器時代 (オールドス期) と新石器時代との間の長い間隙を固より充め得ないのであつて、内陸アジアに於いては舊石器時代人と新石器時代人とが直接の連繫を恐らく有たぬのではなからうか。實に兩者の生活の相違が之を暗示するのである。即ち前者が狩獵民であつたのに對し、後者は最初より遊牧民であつた。彼等は石刃・石七、尖石、石錐等動物の皮を剥ぎ、骨を截り、肉を刻むに用ふる細石器類のみを極めて多量に有して、一方動物の捕獲に普通用ひられるところの石槍、骨銛、尖頭骨器等の狩獵具を全然缺如し、石鏃の使用の如きも比較的稀であつた。而して彼等は馬牛羊山羊等の家畜を有し、水を得るに便利な湖畔河邊、或は朔風を避けるに都合のよい丘陵の麓などの良好な草地に簡單な移動的住居——恐らく旃^{ツェルト}の天幕を營み、僅

かに爐址を残して隨時移動したのである。彼等は磨製の石皿、石杵、環石の類を豊富に有したが、之は家畜の肉をひき、骨を碎く等に利用されたのに相違なく、之に反して磨製石斧、石庖丁、石鐮等を殆んど全く缺いたのは、彼等が農耕用石器を必要としなかつたことを物語る。而して彼等は自ら土器類を發達せしめること少く、多くの場合これを周圍の狩獵民或は農耕民より學び、シベリヤの櫛目文土器、或は中國中原の鬲形土器等を採用し、または兩者の様式を混淆したところの櫛目文ある鬲形土器などを造つたのであるが、一般に土器の使用量は頗る貧弱であつて、彼等遊牧民が破壊し易く、比較的重量に富み、運搬に不便な土器類を愛用しなかつたことを明示する。彼等の貯藏用器としては恐らく革袋類が常用されたのであらう。彼等はまた紡錘車を有せず、骨針の類をも使用せず、紡織裁縫の技術にも熟しなかつたことを暗示するが、恐らく皮革、フェルト等の容易な入手が布帛類の必要を見なかつた結果であらう。一方彼等の間に鬪争が少かつたことは、武器類の缺如、或は未發達、防衛設備の絶無等によつて殆んど確實と思はれる。これは想ふに新石器時代の内陸アジアに於いては人口未だ稀少で、彼等は茫漠たる曠野に海上の漁民の如く散居し、各自自由に遊牧し得て、牧地の争奪の如き争因も未だ生じなかつたからであらう。即ち彼等古代の内陸アジア遊

牧民はその單調空漠な草原的環境に支配されて、恐ろしく素朴な、孤立的な、然し極めて平和な生活を畜群の間に樂しんでゐたのに相違ない。而して斯くの如き原始的な遊牧民が東北は蒙古高原より、西南はイラン、メソポタミヤまで、アジアの乾燥地帯全域に互つて散在したのみでなく、更に西は南露よりハンガリーまで、一方アフリカのエジプト、サハラまで廣布してゐたことが、同種の細石器文化の分布によつて全く疑ない。その居住地域が實に廣範圍に互り、然も經濟的に、文化的に全く單一な様相を示し、殆んど地方差を有たないことは頗る驚異に値するが、然らば彼等のうち何處の住民が遊牧生活の眞の創始者であつたかは未だ解決し得ない難問題である。然し、イランメソポタミア、エジプト方面の所謂オリエントの草原沙漠地域住民が彼等の接觸した同地方の沃土地域農耕民より牛羊驢等の家畜を傳授されたのに始まると云ふ説と、亞歐北部の森林地帯住民がその狩獵生活のうちに動物の飼養法を自得し、まづ犬、馴鹿等を飼養し、ついで中亞の沙漠草原地帯に繁息した野馬、野驢等の家畜化に成功し、この方面に遊牧民として初めて進出したと云ふ説とが最も蓋然性ある二説として考慮に値しよう。恐らくこの兩方の場合が共にあつて、牛羊驢等はオリエント方面より、馬は中亞方面より舊大陸の乾燥地帯附近住民に傳播し、ここに廣範圍に互る原始的

遊牧民の出現とその乾燥地帯の占居を促したものであらうと想像される。

一方印度に於いては洪積紀前期（印度第二氷河期）に盛行した握槌形式の舊石器に對し、その後期（印度第三氷河期）に於いて剥片石器の發達を見た。然しここではアジヤ北半部に於ける如き顯著な細石器化の傾向なく、握槌や縦型石七の形をなした粗大な剥片石器を基本的なものとして、材料は前者同様石英であつた。従つて印度の舊石器文化は前後兩期に互つて恐らく連続したものがあり、その特徴は大形の石器、就中握槌形或は石七形石器の盛行であつて、そこに狩獵生活と共に植物採集の生活の反映が暗示されてゐる。同様な現象は印度支那の最古の遺蹟遺物に就いても觀察される。即ちその所謂ホアピン文化なる後期舊石器或は中石器的文化は、粗大で重い礫石を材料とし、一面だけや打缺いて作つた握槌或は石七やうの石器を以て代表的なものとしてゐる。而して南支那の廣西省やスマトラに於いても同様な石器文化が指摘されてをり、かくして印度より東南アジヤに互つて、その舊石器時代後期乃至中石器時代（新石器時代初期）大形の打石器が行はれたことは、アジヤ北半部の細石器文化に對し顯著な對照をなす事實である。この事實は後者の住民の牧民化に對し、前者の住民の農民化の傾向を示唆し、實際この傾向は新石器時代に及ん

で現實化したのである。即ち前述の如く新石器時代中亞及び西亞の乾燥地帯に畜肉料理用の細石器——石刃、石七、石錐等——が弘布したのに對し、東南アジヤ及び印度の濕潤地帯には伐木耕土用の農具としての磨石斧——半磨製扁平石斧、三角形蛤刃石斧或は棒狀石斧等——が盛行したのである。而してこれらの磨石斧が印度或は東南アジヤの粗大な舊石器、就中握槌及び縦型石七の形式を或程度傳へてゐることは、それ自體の出自を暗示し、東亞に於ける磨石斧の出現とその弘布——それは農耕生活の發達とその傳播とを有力に物語る——が同方面の舊石器文化に胚胎したことを大體推測せしめるのである。

實に印度より東南アジヤ、更に揚子江、黃河の流域を含む中國の沖積平野、また南滿洲より朝鮮半島及び日本列島の西南半を包括する東亞の地區が所謂季節風によつて支配される溫暖濕潤の地帯で、そこを貫流する大河川（インダス河、ガンジス河、イラワヂ河、サルウィン河、メコン河、珠江、揚子江、黃河、遼河等）によつて堆積され、灌漑された沃野に富み、植物の茂生著しく、そこが農耕の最適地であることは言ふ迄もない。さうして磨石斧の分布區域がこの季節風地帯と全然一致してゐるばかりでなく、そこには屢々石犁、石耨等の耕土用具が併存し、またその北半部には石庖丁、石鎌、石杵等の穀物を刈り、穀物を搗く用途

の石器類も少からず見出される。かくてアジアの濕潤地帯住氏が新石器時代既に農耕を以て生活の基調としてゐたことは全く疑なく、彼等はその農耕生活の本質上定着し、或は穴居し、或は堅穴を掘り、或は薄、葦、泥土等を以て小屋を建てたのである。かくしてその住居の群落が處々に發見されてをり、その住氏が相當の勞働力を結合して、或は伐木、或は排水、或は燒畠等、農耕に必須な作業に従事した情況が想像されるのであつて、彼等は恐らく村落共同體的社會を構成してゐたのであらう。また水土の利用に巧みな彼等は深鉢型や壺型の土器を豊富に製作し、それらが食料、就中穀物の煮沸貯藏に使用されたことは推測に難くないが、それに多く繩蓆文或は籠目文が附されてをり、ここにも農耕生活をよく反映してゐる。彼等は紡織裁縫の術も知り、骨石貝製の鋤、瓔、耳飾、笄等裝身具も有した。一方野獸の狩獵や貝類の採集等をも行つて、その原始的農業を補ひ、屢々豚、牛、犬等を飼養して牧畜を副業としたのである。而して豚及び牛が元來農耕的家畜であることは一般に認められてゐるところである。

かくて新石器時代、アジアには東北より西南に斜めに併行した三條の、夫々特異な經濟文化圏の成立を見たのである。即ち北太平洋沿岸地方より滿鮮の一部を含み、ウラル、北歐に及ぶ亞濕潤森林地帯の狩獵漁撈圏、即ち骨角器文化

圏、興安嶺より中亞を経て、西南アジア、北アフリカに連なる乾燥沙漠草原地帯の遊牧文化圏、即ち細石器文化圏、日本列島南半、滿鮮の南部より東南アジア及び印度に至る濕潤季節風地帯の農耕圏即ち磨石斧文化圏がそれである。

然かもこの濕潤季節風地帯の農耕圏のうちには更に二つの地方的經濟文化圏の出現を見たのであつて、それらはいづれも西方の金屬文化の影響を多少とも受けたものであり、従つて新石器時代最末期或は金石併用時代に屬するものと解されてゐる。

その一は黄河下流域の黃土地帯、所謂中原の地を中心とし、石器に於いて扁平板狀石斧、石庖丁、石杵等、土器に於いて鬲、鼎等の三足土器を標識的遺物とした原始農耕圏である。就中鬲、鼎等は穀物の蒸烹に頗る便利な土器で、中原原始農耕民の創作にかかり、その經濟文化圏を特徴づけたものである。彼等は農作以外に、豚を主要な家畜として飼養し、石骨製の箭鏃を以て盛に狩獵をも行つた。而して彼等の間に男根崇拜、即ち増殖豐穰祈願の習俗の存在も臆測されてゐる。

偕て、この新石器時代最末期の黄河下流域原始農耕民が如何なる系統のものであつたかに就いては、種々の議論がなされたが、骨格の研究上原支那人 (Proto-Chinese)

とても呼ぶべきものであることが判明した。然し彼等が孤立したものでなく、西方と密接な経済的文化的交渉を有したことは、彼等がその独特な三足土器と共に、確かにその起源が西方、殊にオリエント方面にあるところの彩文土器を少からず有した事實によつて疑ない。従つてこの時代に彩文土器を齎して西方人が中原地方に移住し來り、その中原支那人に同化されたことが推測されている。一方このことは彼等中原原始農民の間に既に相當程度の富財の蓄積がなされ、かなり遠距離との商業的活動も開始されてゐたことを物語る。而してその實年代は西紀前二千年前後であらうと思はれる。

次に他の一の地方的原始農耕圏は印度の東半部及び東南アジアの大陸部を中心としたもので、有肩石斧及び有段石斧（抉入り石斧）を以て標識的な遺物とし、屢々青銅器を伴ひ、明らかに新石器時代最末期より金石併用時代に互る年代に屬し、黄河下流域の原始農耕圏よりその成立が稍々遅く、西紀前千五百年乃至前五百年頃と推定されてゐる。而して印度及び東南アジアに弘布したドルメン、メンヒル、右甕等の巨石文化もこの原始農耕圏に萌芽し、次の時代（鐵器時代）に及んで廣く傳播盛行したもののやうである。

偕て、この有肩石斧を以て標識とした印度東半部及び東南アジアの原始農耕民が如何なる系統のものであつたかに

就いてはハイネゲルデルン等の提説があり、之が大體承認されてゐる。即ちこの有肩石斧の分布範圍がオーストロ・アジア語の現在使用されてゐる地方、及びその痕跡の存する地域と一致するところから、その使用者はオーストロ・アジア族（モン・クメル族）であつたらうと云ふのである。

かくの如くアジアの季節風地帯農耕圏には、その新石器時代末期或は金石併用時代に相前後して成立した南北二の地方的經濟文化圏があつたが、兩者の限界は今日なほ明瞭でない。然し臺灣及び浙江地方が大體東南アジアの原始農耕圏に屬しながらも、黄河下流域のそれより相當強力な影響を受けたことは同方面に於ける有肩石斧、有段石斧（南方系）と扁平板狀石斧、石庖丁（北方系）との併存關係によつて窺はれる。また黄河下流域の原始農耕圏は北方に向つて甘肅、錦熱蒙古、南滿洲方面にその範圍を擴大したのみならず、更に東は朝鮮半島を経て、日本列島まで波及したのである。我國の彌生式文化に普遍的な扁平板狀石斧及び石庖丁がその明確な證據として擧げられる。一方東南アジアの原始農耕圏は臺灣、中支方面から東支那海を北上して、西日本、西朝鮮、更に南滿洲の一部にまで影響を及ぼした。それらの地方に弘布した有肩石斧、有段石斧（抉入り石斧）——日本に於いて彌生式文化を特徴づける——が東南アジア起源たることは今日殆んど疑ない。かくて日本

最古の稻作農耕文化たる彌生式文化は黄河下流農耕圏と東南アジア農耕圏との雙方よりの影響のもとに形成されたものと考へて大過あるまい。

偕て、黄河中原の原始農耕圏は新石器時代最末期乃至金石併用時代に至つて急速に發展し、その聚落は漸次大規模となつた。先づ壘壁を以て聚落全體を防衛したものが現れ、堅穴の床は往々漆喰を以て綺麗に塗り固められた。土器、骨器、石器等の製作技術も一段と進歩し、殊に農具類の種類と數量が増加して、穀物の收穫も必ず激増したのに相違ない。特に注意すべきは製陶技術の著しい發達であつて、黄河中原固有の土器形式に彩文土器の燒成技術を應用して考案されたところの黑色磨研土器（黒陶）が盛行した。その器形も複雑となり、鬲、鼎、壺、鉢等のほか、所謂三代銅器の罍や爵や、鍔に似た特異な形式のものも現れた。また一部では獸骨による貞卜の風も行はれ、文字らしい記號も使用されたりしい。かくて相當高度に分化した社會がそこに反映されてをり、殷代以後の中原文化の原形も凡そこの時代——新石器時代最末期乃至金石併用時代——に成立し終つたと觀察される。なほ當時大聚落間に相當頻繁に争鬪の行はれたことは、石骨貝製の鏃の豊富なこと、聚落に防衛的設備ある場合のあること等によつて疑ない。而して黑色磨研土器（黒陶）によつて特徴づけられたこの經濟文

化圏は山東、河南を中心に、北は南滿洲の遼東半島に觸れ、南は浙江省の北部にまで及んだのである。かくて黄河中原人が今やその農耕的經濟文化圏に判然たる地方色（個性）を賦與し、かつその勢力圏の輪廓を力強く素描し始めたことが認められる。かくて彼等の經濟生活は獨り農耕方面ばかりでなく、漸次商工方面にも發展し、聚落生活より都市生活に移り、やがてその各地に大小の都市國家を構成するに至つたのである。而してそれら都市國家群の間に自から他を壓して優位を占めた所謂覇者も現れて、少くも若干の都市國家を統括するやうになつた。この時代になれば象形文字による記録がなされ、銅器（青銅器）の鑄造が盛となり、黄河の中原は既に原史時代、銅器（青銅器）時代、明瞭に華夏民族時代に入つたのである。

東洋史上に於ける最初の確實な王朝、殷王朝の支配した所謂大邑商はそれら華夏民族都市國家群中の覇者であつた。少くも中原に於いて最も有力な都市國家の一であつたが、當時他にも獨立した都市國家が相當多數存在したらしく、これらは殷の卜辭に某々の「方」として屢々現されてゐる。盤庚以後の殷朝の廢都として「殷虛」の名の下に古くより知られた河南省安陽縣小屯の遺蹟より發見される多數の卜辭及び各種の遺物に就いて觀るに、殷の社會は父權的部族社會で、その支配者たる部族長「王」は天帝及び祖

宗の祭司であり、その統治に關し一切を占トに問ふた。その經濟生活は黍、麥、禾等の耕作、豚、牛、羊、象等の飼養による農牧業になほ基礎を置いたが、一方その都市國家の繁榮は武力による征服と商業的活動に依存するところすこぶる大であつたやうである。殷の卜辭には三千人乃至五千人の兵隊を動かしたことが記され、また殷虛の一地下

倉庫よりは、土器、骨器、眞珠、鼈甲、子安貝、銅、金、珠等五千八百一件の品物が發見されたと云ひ、如何に殷朝に於いて軍事的活動、富財の蓄積が大規模に行はれてゐたかを明示する。而して象牙、犀角、子安貝、眞珠、鼈甲等の殷都に於ける豊富な存在は、殷人が東南の太平洋沿岸及び南の中南支方面と盛に交易したことを物語り、殷國家繁榮の基礎をなした背後地が黄河下流より東南方面に當つた地方なることを推測せしめる。かくてその勃興は黄河下流域原始農耕圏と東南アジアのそれとの經濟的、文化的接觸乃至合作の結果であると考察し得る點が少くなく、殷代の工藝品を特徴づけた饕餮文、夔鳳文、虺龍文等の盛行もその一例と看做されるであらう。それらの文様は夙にフェノロサが指摘したやうに太平洋沿岸の原住民の間に普遍的に見出される怪奇な動物意匠と同類のものである。また彼等の銅器の鏤刻及び象牙の彫刻に於ける驚嘆すべき技巧の發達は自からそれらに先行して木器及び木彫の非常

な盛行を豫想せしめ、彼等殷人の原住地が南方の一層森林に恵まれた季節風中心地帯附近に在つたか、或は當時氣候が現代より一層濕潤で、黄河の流域地方もなほ森林に覆はれてゐたか、何れかであつたことを推測せしめるのである。而して殷人飼象の問題がこの推測を肯定せしめる。

然しながら殷國家の經濟的、軍事的、文化的發展に於ける西方の影響も亦看過し得ないものがある。それは銅器（青銅器）の鑄造技術と袋穗のある斧鉞、矛戈及び刀子等の銅利器形式の傳來である。これらの銅利器の原型の起原地が西南アジアより東歐方面に在つたことは今日ほぼ疑ないが然らば如何なる時代、如何なる經路によりこの西方の銅器（青銅器）文化が東亞に傳來したか、この問題は重大ではあるが、なほ充分に闡明されてゐない。然しながら少くも二條の經路が今日想定し得るのである。一は印度を經由して東南アジアに至るものであり、他は中亞を經由して長城地帯、黄河下流域に向ふ經路である。この兩經路により大體前後三回金屬文化の潮流が西南アジア方面より東亞に波及したやうに觀察される。

最初の潮流はスーザ、ウルの發見品によつて代表されるやうな、西南アジアの銅石期乃至青銅器時代初期に屬する金屬文化が彩文土器を伴つて東漸したもので、西紀前三千年頃印度に入つては所謂インダス古代都市文化に於ける平

斧、鬪斧、槍首、鑿、錐等の銅（青銅）製品となり、中亞に流入してはアナウ北丘の古代聚落文化に於ける槍首、鎌、短劍等の銅製品となつた。而してこの兩者共彩文土器を共存したのである。このうちインダスの銅器文化は印度中部地方にまで影響を及ぼし、そこに有肩型の銅斧を出現せしめたが、この有肩銅斧こそ東印度、東南アジアに於ける前述の有肩石斧と形式上關係を有するもののやうで、換言すればその祖型と考へられるものである。かくて西南アジア起原の銅器文化が間接的に東南アジアまで影響したらしく觀察されるが、當時鑄銅技術そのものは中部印度より東方には殆んど傳はらなかつたらしい。

一方中亞を経由した西南アジアの古銅器文化も、之に伴存した彩文土器の青海甘肅地方、黄河下流域地方に於ける分布によつて、その東漸の事實は疑ないが、然もそれらの地方には彩文土器の盛行期に未だ銅器の製作された痕跡なく、従つて東亞は當時なほ大體に於いて新石器時代に屬し、そこに鑄銅技術の受入されたのは、その後のことに相違ない。

第二回の金屬文化の潮流は、南ロシア、東ロシア、ダンユーブ流域等の東歐の所謂先スキタイ(Pre-scythic)の青銅器文化の東漸で、大體西紀前二千五百年乃至二千年頃、先づ中亞のカザクスタンを経て、一方は西シベリヤに入りアン

ドロノヴァ文化となり、一方は長城地帯、黄河下流域地方に流傳したもののやうである。袋穗のある槍首(矛)や斧鉞類、兩側に突起のある平斧の如き青銅利器がその著例と認められる。さうして殷代銅利器の祖型もこの系統に出づることは、形式上、年代上ほぼ推測するに難くないが、然しながらそれら銅利器は細部の形式に於いて、また文様、銅質その他の點に於いて既に多分に中原の地方色を發揮してをり、東歐の先スキタイ青銅器の黄河下流域傳來の時期が殷時代を溯ること相當古いことを暗示し、恐らく黑色磨研土器(黒陶)の行はれた大聚落時代には既に一部に銅利器の鑄造使用を見たやうに推測される。

第三回の金屬文化の潮流は西イランのルリスタン、タリシユ、カウカサスのコーバン、カヅベック出土品によつて代表されるやうな西アジアの青銅器時代末期文化のそれで、南露のポドゴルツァ文化、オーストリアのハルシュタット文化等の東歐の青銅器時代末期乃至銅鐵併用時代(古鐵器時代)の金屬文化とも密接な關係を有し、所謂アジア・アーリア人の所産で、彼等の移動と共に東西に傳播したものと想定されてゐる。その金屬文化の特色は、アジア・アーリア人の得意とした車騎戰に適合した新形式の弓矢、鬪斧、短劍類の盛行と、馬具及び車具の著しい發達にあつた。またその裝飾意匠は彼等の牧人的好尚を反映して獸文の頻繁

な適用を以てした。要するに西亞の山岳地帯——パミール西麓地方、北イラン、カウカサス地方等——を根據とし、牧主農副の生活を営みながら、常に車馬を驅使して勇敢に奮闘した「山の武人」たるアジア・アーリヤ人の創造した青銅器文化で、彼等の一部はその新銳の青銅武器を携へ、軍馬を驅つて、一方は西南アジアの沃土地區に、一方は印度の西北部インダス方面に突如として侵入し、遂にそれら南方濕潤地帯の征服者となつたのは西紀前千五百年前後のことであつた。さうして彼等が印度のガンジス河方面にまで發展するに及んでその金屬文化も漸次東方に普及し、遂に西紀前五百年前後であらうと思はれるが、東南亞細亞にまで鑄銅技術が傳來して、そこに金石併用時代を現出することになつたらしい。佛印、雲南出土の青銅器の或るもの（短劍鬪、斧等）がルリスタン、コーバン、或ひはハルシユタットの青銅器と頗る共通した形式、文様を有する所にもかくして理解し得られるのである。なほ東南アジアに於いては、それらと共に特有の銅鼓、銅斧等も鑄造され、また黃河中原の金屬文化の影響を早くも蒙つて、特殊な形式の戈などを發達せしめた。かくして西亞アーリヤ的、東南アジア的及び黃河中原的な複雑な要素より成る青銅器文化が東南アジアの大陸部を中心に、東はジャワ、チモールなどの南方の島嶼まで、西はビルマ、北は揚子江流域附近ま

で普及したのである。さうしてこの青銅器文化の傳統は銅鼓によつて窺はれるやうに比較的近世まで及んだ。

一方アジア・アーリヤ人の移動は獨り南方に向つたばかりでなく、北方に對しても行はれ、かのアーリヤ人の支那トルキスタン占據は同時に起つた現象と解される。それはアジア・アーリヤ人の發達せしめた特殊な武器——兩翼鏃の弓矢や有孔槌斧・環狀斧等の鬪斧類や柄部の扁平な短劍等——が西紀前七百年乃至四百年頃支那北邊の長城地帯住民の間にも盛行した事實があり、これに依つて西亞のアーリヤ人がそれらの武器を携行して支那トルキスタンに移住すると共に、青海、甘肅以東の長城地帯住民と接觸交易し、後者に對して鑄銅術と共に、その新銳武器を傳授したものに相違ない。

一方、東は興安嶺南部地方より、西は甘肅青海地方に及ぶ所謂長城地帯の住民は、北方の蒙古遊牧地帯と南方の中原農耕地帯との中間山岳地帯にあつて、その新石器時代には農主牧従の生活を営み、石斧、石耨、石庖丁等を用ひて、主として農耕に従事すると共に、兼ねて石刃、石七等の細石器を以て家畜の調理をなし、その家畜に豚と羊があり、土器には北方系の櫛目文土器と西南方系の彩文土器とを併有し、また兩者の様式の混淆した特殊な土器——赤色磨研孤線文土器——を創作した。これらによつて彼等の經濟生

活が南方の農耕生活と北方の遊牧生活との合體に他ならぬことは明瞭であるが、然しその生活が農耕を主とし、牧畜を従としたものであつて、その文化に南方黄河中原的色彩が濃厚で、之に北方蒙古草原的色彩を加味したものであると云ふことは、彼等東亞の中間山岳地帯新石器時代人が當時の北方草原地帯住民よりは、寧ろ南方の黄河中原の新石器時代人と一層緊密な關係にあつたことを明示してゐる。一方體質上より考察しても、彼等兩者の類似は顯著であつて、恐らく人種の根源を一にしたと想定されてゐる。然るにこの東亞の中間山岳地帯住民は、西紀前七百年乃至四百年頃アリア系の青銅器文化を受入すると共に牧主農副の生活に轉じ、多く犬羊牛を飼養し、馬も所有したが、豚は前代（新石器時代）に比して頗る少なくなつた。彼等所有の青銅器として、刀子が最も普遍的且つ多數の事實も牧民として家畜調理器具が特に重要であつたことを物語つてゐる。また土器に於いて壺、鬲、鉢等がすべて小型になつたことも農民よりは移動性に富む牧民の生活に適はしい變化であつた。それと同時に彼等は新來の青銅武器——兩翼鏃付弓矢、有孔槌斧、環狀鬪斧、短劍等の飛兵及び短兵——を以て頻繁に戰爭に従事したらしい。然かもその飛兵及び短兵の愛用は彼等が歩兵或ひは騎兵であつたことを暗示し、その點南方黄河中原都市國家民が多く車戰の兵士で、矛、戈、戣、

長劍等の長兵を發達せしめたのと全く好對照をなした。而して彼等東亞の中間山岳地帯青銅器時代人の主要な侵攻對象は勿論當時漸く富強を誇つたところの黄河流域の都市國家民（華夏民族）であつたのに相違なく、戰爭その他による兩者接觸の事實は前者が少なからず子安貝を有したところ——之は南方の原産であり、その入手経路は黄河流域方面より相違ない——や、彼等之間に於ける鬲、鼎等の中原起原の三足土器の採用等の考古學的事實によつて、また當時即ち中國史の春秋時代頃、黄河流域中原の北方に當り、中間山岳地帯の南邊に於いて、東に貊、中央に狄、西に犬戎等の活躍目覺しく、華夏の諸國はその防衛、征服同化に苦心したと云ふ歴史的事實によつて明證される。然かも史傳によれば、黄河中原人は彼等を全く夷狄視したが、その無理からぬことは彼等北方の青銅器時代人が農商の民でなく、寧ろ山武士的牧民であり、彼等の着用した衣服や彼等の使用した武器その他が黄河中原のそれと頗る類を異にしたものであつたと云ふ——兩者間に於ける經濟的、文化的相違の顯著なことより容易に首肯出來るのである。然し一方體質的には彼等東亞の中間地帯青銅器時代人も——即ち中國史に所謂貊、狄、犬戎等も彼等の住地に於ける前代の人即ち新石器時代人とも、黄河中原の華夏民族とも大差ないところの同類の人間であつたのである。即ち北方の

貊、狄・犬戎等は南方の華夏民族と同一人種にして、然も互に判然と異なつた民族文化を構成したばかりでなく、今日の長城地帯南邊を以てほぼ境界となし、兩者は烈しく對立抗争したのである。即ち之がアジア史上最も顯著な現象の一たる南北對抗戦の序幕に他ならない。

要之、アジアに初めて人類が出現した太古より、そこに農村、牧畜の生産技術を有ち、金屬文化を發達せしめたところの諸民族の成立を見た黎明期に至るまで、アジアの人類史を想定すれば、未だ調査研究の結果が頗る不十分な爲め頗る漠然とした域を脱しないが、大要以上の如きものであつたと思はれる。さうしてそのうち特に重要と思はれる事柄は、アジアに於いては舊石器時代と新石器時代との連續關係が未だ殆ど不明であるが、前者と後者との間には文化的に相當緊密なつながりがありさうに推測されること、また新石器時代の黄河下流域及び東南アジアの兩原始農耕圈並に長城地帯の原始的農主牧從圈が西方よりの青銅器文化の傳來により、それ／＼新石器時代を脱して、東亞に三つの特異な地方色ある青銅器文化圈を現出したこと、最後に黄河下流域に大聚落、ついで都市國家が勃興し、長城地帯に山武士的牧民が生起して、兩者の間に激烈な對立抗争を展開したことなどであらう。さうしてこの最後の長城地

帯を中心にした南北抗争はその後の歴史時代に於いても相當長期間東亞に續行し、アジアに於ける人類の運命を大きく決定する役割をもつたのである。

◆ 第三號 豫告 ◆

日本神話の文化的意義……………	松本芳夫
古代の氏族文學……………	折口信夫
野の村と濱の村……………	中井信彦
——古代贈答習俗考——	
かゞみ……………	保坂三郎
眞野古墳郡調査概報……………	藤田亮策
立木・園生兩貝塚の魚骨……………	大給尹
紫音樂宮に關する二、三の考察……………	清水潤三
極光史料と氣候七百年周期說……………	西岡秀雄